

除夜の鐘

平成29年12月第5週放送

番組が放送されるこの時間、次第に東の空が明るくなり始めてきます。間もなく夜が明けて、^{おおみそか}大晦日の一日が始まろうとしています。

ラジオを聞いていらっしゃる方は、朝早く目覚めた方も、夜勤明けでこれから休まれる方もいらっしゃることでしょう。夜も煌々^{こうこう}と明るい今の時代にあって、この社会は、二十四時間絶えず誰かの働きによって成り立っています。これほど夜に街が明るくなったのは、人間の歴史の中でもごく最近、ほんの数十年のことです。

以前の人間の暮らしはどうだったのでしょうか？

^{しゅりょう}狩^{のうこう}や農^{かか}耕に携わり生計を立てていたころから、日の出は自分自身の体を目覚めさせてくれる大切な合図となっていました。日の出とともに目覚めれば、家を出て日中いっぱい仕事に励み、日没とともに仕事を引き上げ家に戻ります。家に戻ると、その日の自身の仕事を振り返り、翌日の目標を思い床に就き、次の一日のために体を休めます。

昼と夜は、光と闇で私たちが見る景色を変えます。その様子から、同じものでもまるで別な姿があるように、^{こと}異なる姿が共存する喩えとしても用いられます。

また、私たちにとって、昼と夜は一つの時間の流れにある二つの側面として、それぞれの役割を持っています。^{あゆ}歩みを先に進める日中の時間と、日が沈み、歩みを止めて振り返り、次に訪れる日中に歩を進めるための英気を養う時間という役割です。昼と夜が交互に訪れて、歩み、振り返り、そしてまた歩むということを繰り返しながら、私たちは一日一日を積み重ねていきます。

年の終わりの今日の日を^{おおみそか}大晦日といい、その夜を^{じよや}除夜といいます。

夜が深まる頃、どこからともなく除夜の鐘の音が聞こえてきます。一年の始まりと終わりを考えれば、今日のこの夜に今年の自分自身を振り返り、またこの夜を、日が昇って新たに始まる一年に向けての英気を養う時としてみるのはいかがでしょうか？

— 終 —